

主体の解釈学

1982 年 2 月 17 日の講義（第二時限） pp.315-32

K 原

〈今回（2/17 2 時限目）セネカ『自然研究』の分析続き〉

- ◆ セネカ「死ぬことから逆算して生きるのだ。自己への隷属から、解放されなければならない。自分の自分による隷属から解放され自由になれる。一方で、自分中心に人生を考えるべきだ。それによって唯一の正当な喜びや満足を得ることができる」「そのためには自分への要求を少なくすること・金銭上の手当や労働の報酬等に付随しがちな価値(利得)から解放されることだ。そのような自己関係から解放されることだ」「そのためには自然研究だ。自然研究こそが自己への隷属から自己を解放してくれる。自然研究は事物の自然＝本性を眺め、調べることで、それが自己への隷属からの解放に役立つ」
- ◆ （疑問）結局、「第二の哲学」って何？

セネカ『自然研究』第三部序説の分析の終り（pp.315-6）

セネカ『自然研究』第三部（巻）序説

- セネカは世界を歩き回る。このとき、彼は年老いている。年老いたときは、自分の所有地を気遣わなくてはならない。自分の所有地を気遣うとは、誘惑に打ち勝ち、歴史家の年代記ではなく 自分の精神を目標に定め、死を覚悟する＝この世から去る準備をする、ということ。
- この「自分の精神に目標を定める」という時のこの「目標」を、どう世界を踏破するという可能性や必要性につなげて考えればよいのか？セネカによれば、死について省察し、死を受け入れる時、（ローマ市民の権利による自由ではなく）自然の権利による自由が存在するらしい。が、この時の自由とはどんな自由なのか？

セネカにおける、認識する魂の運動。記述。一般的な特徴。反作用（pp.316-8）

セネカいわく…

- 「自由であること、それは隷属から逃れることである」何への隷属？自己への隷属である。
- 「自己を隷属させているものから解放しなければならない」（ストア派）
- 自己を保護し、守り、尊重し、崇拝し、あがめ奉らなければならない *therapeuein hearuton* = 自己自身を崇拝しなければならない」「自己を中心に人生を組み立てなければならない。自己を目の前に置かなければならない」

このようにすることで何が得られるのか？

→「このうえなく大きな喜びを、唯一の楽しみを、唯一正当な *gaudium* 喜び、満足を得ることができる。こうした喜びだけが、いかなる危険にさらされても、もろく崩れ去ることなく将来も再び崩れることはないだろう」

↓

自己とは「崇拝すべき、追い求めるべき、目の前に置いておくべきもので、絶対的な喜びを感じるようなものである」、一方で「自己への隷属から解放されなければならない」…セネカのこれらはどうすれば両立しうるのか？

「自己への隷属」について（セネカいわく）

- 自己への隷属は、我々が戦わなければならないものである。自由とは、自分自身への隷属から逃れることである。
- 自分自身への隷属は不可避ではあるが、それは絶対に乗り越えられないという意味ではない。避けられないものではあるが、課せられているこの隷属に対して、我々は戦うことができる。戦って容易に隷属を振り払うこともできる。

そのための 2 つの条件：

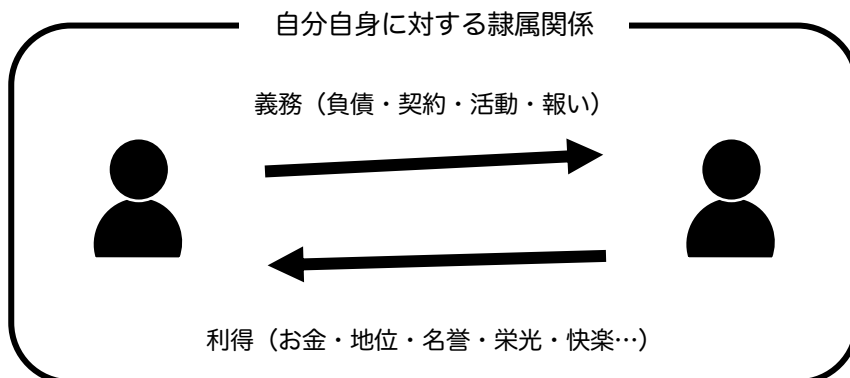
条件 1) 自分自身に対する要求を少なくすること。

→要求が多ければ多いほど、それは自分に多くの苦しみを与えることと同じである。

条件2) 金銭上の手当や労働の報酬等に付随しがちな価値(利得)から解放されること。

→ここで言われている「自分自身に対する隷属」とは、自己に対する義務=負債、契約、活動、報いのようなものである。自分に対して義務を課し、自分に負債を負わせるような関係から解放されなければならない。

- さらに、自分に義務(負債)を課し、利得(お金を儲けられる、株価が上がる、昇進する、地位と名誉を獲得する、栄光や名声を誇る、快樂を得るなど)を引き出そうとする、こういう自己関係から解放されなければならない。



そのような自己関係(義務=負債のシステム)から解放される方法:

- 解放を可能にしてくれるのが自然研究である「こうした解放のためには事物の自然=本性を眺め、調べてみることが役立つだろう」(セネカはこの断言より先には進まない。こうやって言うだけ)

結論。自己認識と世界認識の本質的な意味。世界の知の開放的な効果。[プラトンのモデルは]プラトンのモデルに還元できないこと (pp.318-)

第一部(巻)の序説の研究

- 第三部での関心ごと: 年老いた私がなぜこの研究(自然研究)に向かうのか?
- 第一部での関心ごと: 自然研究の一般的かつ抽象的理論

第一部の序説は、哲学を2つの部分に分けることから始まっている:

- 1) 哲学は、人間に関わる、地上でおこなうべきことを教える。「何をなすべきか」を問う。
- 2) 哲学は、神にかかわる、天上で起きていることも教える。

この1)と2)の間にはたいへん大きな重要度の差、位の差がある。

(書簡第88の「自由学芸と哲学の関係」は、この関係(人間に関する哲学と神々に関する哲学)の関係と同じとのこと)

もう一点、議論の順番の問題がある。

- セネカは必ず、日常の行為においてなすべきことに関する長く続く書簡のあとに世界や自然一般の次元について考察している。「まず自分自身を吟味し、考察すること、そして次に世界を吟味し、考察すること」(p.318)
- なぜこのような順番で述べられるのか? その根拠は、第一のものが第二のものに比べて不十分だからだ。第二のもの(神々の哲学)だけが第一の哲学を完成できる。
- 第二の哲学は、人生の道を照らす光を利用することだけではなく、闇から我々を引き離し、光源にまで導いてくれる。ということは、第二の哲学では全く違うことが問題となっていて、それはたんに生存や行動の諸規則を知ることではない。単なる知識とは全く異なる(第一の哲学=人間に関わる何をなすべきかは、ここで言う「知識」なのか?)。それは、主体の現実的な運動、魂の現実的な運動である。主体自身の移動ということになる。

- この運動は、4つの特徴を持っている。

特徴その1：「君は多くのことから逃れた、しかし君自身からは逃れていない」

顔や言葉を繕うことをやめ、嘘をつくこともやめ、ひとをだますこともやめ、食欲も贅沢も野心も放棄した。だけでは、「君は多くのことから逃れた、しかし（第二の哲学がなければ？）君自身からは逃れていない（＝自分にまだ隷属してしまっている）」→自分自身からの逃亡（＝隷属からの解放）は、自然認識により保証される。

特徴その2：神々の哲学は主体自身の移動である。これにより自分自身を「光がそこからやってくる地点」へと移動させた結果、自分を喪失したりするわけではない。我々は「神々の本性の共有、神と共同して働くこと」ができる。つまり、人間の理性は神の理性と本性を同じくしていると言っている。だから、神が世界に対してなしていることを人間理性は人間に対してなさねばならない。

特徴その3：光まで連れて行き、我々自身から引き離し、神との本性の共有にまで導いてくれる運動において、我々は最も高い地点にまで昇ることになる。我々がこの世界で位置している水準、ある事物よりも上に高められた瞬間に、その瞬間に我々は自然の最も奥深い秘密に分け入ることができる「魂は自然の最も内部の、最も内密の中心部に、懷に[たどりつく]」。

特徴その4：この主体の運動は、神と本性とを共有する我々を、この世界の最も高い地点につれていく。頂上にいるとき、自然の内奥が、秘密が、懷が我々に明かされるが、その瞬間も我々はこの世界を離れることはない。私たちは、この運動のおかげで、私たちがいる地点から退き、この世界における我々自身を見ることが出来る。世界から身を引く運動によって可能になり、自然の秘密が明かされる世界の頂点への上昇によってこれが可能になる。

このような視線が可能になることで、何が可能になるのか？

- この視線は、全てを本当の大きさで見ることが可能にしてくれる。私たちが解放される以前に善だと見ていたものの卑小さ、その不自然で人為的な性格をわからせてくれる。富、快樂、栄光などの儚い出来事のすべてが真の大きさを取り戻す。*ここで「真実」ではなく「秘密」と言って使い分けられていると思われる。
- 私たちが事実そうあるような、現実の生存をこそ正確に計らなければならない。私たちは、世界のシステム全体において私たちが点とみなさなければならない（現実の生存は、じつは点にすぎない）。

セネカの結論(1)

- 「きちんと自分を知るためには、自然に対する視点を持っているという条件が必要である」

セネカの自己認識において、自己認識は内面性のようなものではない。自己の分析、自己の秘密の分析などとは無関係（ちなみにこれはキリスト教とがのちに良心の秘密 *arcana conscientiae* と呼んだもののことである）。

- 〈汝自身を知れ〉が自然認識に結びつき、自己の探究において自然認識と自己認識とが結合しているのは、我々がひとつの点でしかないからである。単なる点だから、内面性とかは問題になるはずがない。

→ここで提起される唯一の問題は、それが場所にある場所に身を置くと同時に世界のこの一点に我々を置いた合理性のシステムを受け入れること。

セネカの結論(2)

- 自然についての知は、解放的な効果を持つ。ここでの解放とは、この世からの決別やこの世の放棄ということではまったくない。この解放は二つの本質的效果を持っている：

1) 理性としての自己と個人的な要素としての自己との間に最大限の緊張を獲得する効果

ここで言っている理性としての自己は、神の理性と同種の普遍的理性でもある。個人的な要素としての

自己は、世界のどこかで、まったく限定され局在化された場所に置かれている。この理性としての自己と点としての自己の間に最大限の緊張を打ち立てることが、自然についての知の第一の効果である（「最大限の緊張」とは？）。

- 2) 我々の視線をよりうまく調節し、たえず我々自身に目を向け、そうして自己の観照を確実にする効果
これにより、世界の内部にいる我々、さまざまな限定や必然性の総体に結びつけられながら生きる我々を把握する。だから、自分を見失わないことと、視線で世界全体を踏破することの二つはたがいに分けることのできない活動である。

ただし、これは後退の運動、主体の霊的な運動があることが条件である。この条件が主体の自己と自己の間に距離を打ち立てる。そうして主体は世界の頂点において、神的な理性によることができる。

- セネカ「徳を持った魂とは、世界全体と交流し、そのすべての秘密を探索しようと注意を払っているような魂である」

→徳ある魂とは、世界全体と交流し、その出来事や行為やプロセスを構成するものすべてを観照するよう注意を払うような魂のこと。そのとき「魂は行為においても思惟においても自分を統御することができる」世界から離れるのではなく、世界に組み込まれること、内面の秘密のほうへ目をそらすのではなく、世界の秘密を探索すること、こうしたことにこそ、魂の「徳」がある。

セネカの結論(3)

- セネカの運動は、プラトン主義的なタイプの運動と近いが、しかしまったく違う。
- プラトンは想起によって魂の本質を再発見する（無知の知に気づくアルキビアデス）が、セネカに想起はない。世界の事物の探究、その原因の探究をする。それら実際の探求を通して、今現実世界に世界の合理性を理解する。

→人間の理性と神の理性の本性の共有、機能の共有が発見されないといけないことである。自分を鏡に移してみる魂の想起ではなく、世界の秩序を踏破する精神の好奇心に満ちた運動によって作られる。

- セネカの場合、別の世界への移行（＝この世界から目をそらすこと？）がまったくない。この運動によって達する世界は我々がいる世界にほかならない。私たちは後退りしながら世界から遠ざかる。目をそらすのではない（で、プラトンの場合は自分自身のことへと目をそらしていると言いたいということだな）。
- マルキアへの「心の慰めについて」：世界全体への俯瞰的視点という西欧の色々を貫く重要な主題が見られていてまず面白い。ここで問題にしているのは、資格を持った人間が選択をして運命を選ぶことができる世界であるということではない。天空や彗星の壮麗な眺め、大地や光源や海や山の美しさは、心身の疫病や戦争や略奪や死や苦しみと不可分なものであるということを理解すること。
- ここで問題なのは、天空や彗星の壮麗な眺め、大地や光源や海や山の美しさは、心身の疫病や戦争や略奪や死や苦しみと不可分なものであるということを理解すること。
どのような人生を送るかを選ぶことができるが、どれを選びたいか、ということは問題ではない。ここで問題になっているのは「生きたいかそうではないか」の2択である。生きることを選んだら、素晴らしい天空～みたいなものもあるが、苦しみも待っている。だから、どうする？生きる？生きたくない？どっち？

俯瞰的視点 (pp.329-30)

- 同様に、賢者が人生の終わりにおいて、世界全体－苦しみと偉大さの連鎖－を眼前にしたとき、その瞬間に彼は生きるべきか死ぬべきか、自由に選択することができる。この自由は、俯瞰的視点のおかげで可能になる。この俯瞰的視点は、世界の頂点に昇り、神との本性の共有に至るときに与えられる。自然研究こそがそれを可能にしてくれる。